

不安 1人じゃなかった

マイクを握り締め、生活や将来の不安を口々に訴える人々を見て、幸さんは胸が熱くなつた。
「一人じゃなかったんだ」
2月末ごろ、会津若松市で開かれた大熊町議と町民の意見交換会に出席した時のことだ。100人ほどの参加住民は、時に怒声

を上げて町の政策や姿勢を批判した。

「除染の実施状況をちゃんと知らせてく

れ」「年寄りは賠償がどうなるか分かる前

に死んじまう」

幸さんは、訴えの一つ一つが、自分の氣

持ちを代弁してくれたように感じた。

深い雪に包まれた仮設住宅暮らしが続

き、自分たち家族だけが、事故への憤りや

進まない補償へのいら立ちを引きずってい

るような錯覚に陥っていた。

原発
1
から
避難
いつの日
か

-35-

「東京電力の補償問題で個人で弁護士に相談したりして、自分だけが先走っているような孤立感もあった」と幸さん。2時間半のやりとりを聞いて、会場を出る足どりは少し軽くなっていた。

情けなかったのは、「私たちにあまり力はありませんから」などと言い、町民の不安にはほとんど明確な回答をしなかった町議たちの姿だ。

「結局、自分たちで頑張るしかないんだ

な」 よくも悪くも、前に進むきっかけをくれた日になった。

■ 塙(はなわ)さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(44)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生活。